

茶室からエレクトロニクスへ

—— 逆風の中における未来への対応 ——

安 西 二 郎

From Tea Pavilions to Electronics

——How can we cope with the Adverse Winds? ——

Jiro ANZAI

第二次大戦の戦火の灰燼の中から、あたかも不死鳥のように再生し、ほんの数年前に高度成長の高みに達したハズの日本経済が瞬転裡にバブル崩壊現象を露呈し、いわゆる貿易戦争においても日米攻守逆転の悲境におちこみつつある。更に金融界に眼を転じて、ミッドウェーはおろか、ソロモン海戦以降の日本海軍の連敗を思わす凶相と陰りを呈しているのは何故か？

思えば、故松下幸之助氏ゆかりの PHP 研究所より、『ミッドウェイ海戦の心理学』（1986）なる一書を上桂し、数年前から、この種の事態の展開を予測警告し続けて来た本論筆者には、まさに出番当来の感慨ひとしお迫る昨今である。

それにしても、この急転直下の崩落を招来した逆風の風配図（Wind Rose=特定風土における年間を通しての風の特性を図化したもの。）を描きつつ自省の必要が今ほど我々にもとめられている時はない。

思えば、本論筆者は拙著『ミッドウェイ海戦の心理学』の結論部分の中に、今からほぼ8年前、以下のようにのべていたのである。

「ミッドウェイ海戦の本当の悲劇は、条約締結以来幾多の悲劇をのりこえて練りあげてきた、いわば利休風のわび茶道で相手をあしらうかわりに、相手の銀器で味方が目をまわすようなボトラッチをやったことにある。更にいえば、劣勢に迫りこまれた相手が、どう出るかという、相手の立場に対する感情移入力を全く喪失していた点にある。奇襲をはかって、逆にわが方が奇襲されているのだ。私見によれば、今日、日本の上下に溢れている欧

米人の能力に対する下算と傲慢ぶりは、淵田・奥宮の両大佐が、ミッドウェイ作戦の教訓として大書している《勝利病》を思わすところなきにしもあらずである。再思反省するに、欧米はもとより、わが隣人たちも、今はミッドウェイをバイブルとして、打倒日本を考えているかもしれない。特に、米はミッドウェイにおいてしめしたような車掛かりの戦法の発動寸前かもしれぬ。さらにいえば、英国についても、われわれはかつての潜水艦作戦以上に学ぶべきことは多いと思う。日本が東京オリンピックや万博を成功させ、エネルギーと資源の多量乱費にうつつをぬかしているころ、英国は一大決意をかためつつあった。とみるや、敢然として北海の怒濤をおしわけ、石油と天然ガスの自給体制をととのえたのである。さらに飛行場用地に問題があるとみるや、米海兵隊はもちろん、新中国からも目をつけられたVTOL（垂直離着陸機）ハリヤーを開発していたのだ。思えば、英一国に限っても、その独創性は決して枯渇したのではない。むしろ、英米の創造性は、今日古代ローマの後裔たるイタリアが、多少経済には問題があっても、相変わらず創造的なデザインで気を吐いていることも含め、そう簡単に欧米が没落するとは思えない。それよりも、世界の文化は、その多種多岐にわたる推力因子が、さまざまな振幅をもつ波動をなし、互いに追いつ追われつ、からみ合うと見えつつ離れ、あるいは永遠の漸近性とでもいうような平行現象を見せていくこともあるということだろう。¹⁾」

と大書しておいたのである。

それにしても、佛への献茶に始まり、やがて禅機や禅精神の世界へと昇華されていったわび茶のわび心ではなく、一連の型にはまった所作の反覆強迫症（Wiederholungswahn oder Wiederholungszwang）とも言うべき行動の連続や集団的で上意下達的な粘着性（Viskosität）のみをよとする徳川体制的な道化にのみ目が向く傾向が、香道や花道や茶道はおろか、産業界や金融界にも遍在し、いかなる外来の風さえ一度わが風土に招入された未え、ほとんど必ず道化しているのだ。

私見によれば、デミング博士の肖像を铸込んだあのデミング賞に象徴されるQC=Quality Control（品質管理）の、欧米人もビックリの成功例、日本人による完全受肉化の事実こそ、未来を見通せぬ外来術のこれ以上ない道化の傍証と言えよう。が、これをもって一方的に喜こんでばかりはいられないのである。

実を言えば、この喫茶や献茶の風の道化にこそ、問題があるのだ。それは他でもない、喫茶や献茶の風を、禅精神を契機としてわび茶に昇華させた利休居士の内心とは完全に対極対蹠的なもの、利休の案じたわび心に全くはずれたものではなかったか、との根本的疑問さえ生じて来るからである。

よく考えてみれば、利休の高弟として知る人ぞ知るあの山上宗二（彼の名を冠した名著『山

上宗二記』で知られる人。その気迫の鋭どさにより秀吉の不興をかい鼻そぎの刑に處せられた）の説く利休のわび心こそが、今日のわれわれ一人一人にこそ最も必要なものののだ。

上述の山上宗二記中に、以下のような記述がある。

「紹鷗逝去三十余年己後、宗易先達也。宗易尊師に二十余年の間聞置く密伝等、書改え、²⁾
令今案者也」

とあるのだ。この『宗二記』の中に、ある有名な利休茶風についての言に、以下の数節がある。

「宗易ハ名人ナレバ、山ヲ谷、西ヲ東ト茶ノ湯ノ法ヲ破リ、自由セラレテモ面白シ。平人
ソレヲ其儘似セタラバ、茶湯ニテハ在ルマジゾ」³⁾

と喝破している一文である。

足利義政（1435—1490）に対する村田珠光（1422—1490）、織田信長（1534—1582）に対する武野紹鷗（1504—1555）、豊臣秀吉（1536—1596）に対する千利休（1522—1591）、更に家康に対する古田織部（1543—1615）という、時代精神の相関図はさておいても、山上宗二がいち早く見抜いていた利休のわび茶の本質こそ、まさに「山ヲ谷、西ヲ東ト茶ノ湯ノ法ヲ破リ……」とする精神革新や技術革新こそを、わび茶の眞ズイと見破っていたもので、これこそまさに数百年も後になってかのシュムペーター博士（1883—1950）の説いた「創造的破壊」の思想の超先取りであったといっても過言ではあるまい！

師の宗易（利休）を迎賛のあまり、山上宗二の言葉は、わび茶の中から俗人性や俗物性を徹底的に排除しているが、その心は、禅機にたって、浅薄な模倣性を排除することを強調するあまり、シュムペーターの説いた「創造的破壊」を彷彿さす強い排他的ともとれる文言を用いている。

よく考えてみれば、これこそ現代の我々にこそ通じる「頂門の一針」であろう。

この破天の風を上下共に受けいれぬ限り、未来は開けてこない、と言ってよいだろう。

だが、かく言ったからと言って、本論筆者は、バブルが崩壊し、日本の貿易戦争の立場が逆転したからといって、それでは「清貧の思想」や「精神主義」にかえればよいというような御題目をとえようと言うのではない。

このような単純なスイッチ操作による切り抜けこそ、まさに利休やシュムペーターの説いた点から、もっとも遠いものであることだけはたしかである。

それでは何をなすべきなのか？

利休居士千宗易が方寸の空間の中に創造したいくつものわび文化の伝統については、今更ら

言うもあろかであろう。が、一般はおろか、茶人でも見逃している点がいくつもある。

その第一は、茶席へ通じる縁側をとりさり、にじり口を創出している点だ。この点について筆者は、1971年に世に問うた自著『茶道の心理学』（淡交社）の中でも、何個所にもわたって言及して置いたが、旧い京都新聞の文化欄や追大新聞の中で、このにじりを創出すると同時に、縁を取りはらった点を、自動車につきものようになっていた Running Board（ドアの下から、外側につき出しているふみ板/今でも、トラックの一部にはのこっている）を排した、クライスラーとうの流線型で車高の低い車に行われた技術革新のはるかなる先取りと指摘しておいたこともある。

わび茶室にまつわる利休の今一つの創造は、利休のはいていた足袋が、なんと浅黄色の数寄屋足袋であった、という点である。これについては同じく、拙著『茶道の心理学』の中に、以下の引用のようにのべておいたのである。

「足袋についてさらに驚くべきは、茶聖利休自身の足袋は青く、秀吉のそれは赤であったらしい点である。この点については、次章で検討して行くことにする。⁴⁾」

と指摘しつつ、二章のほぼ全面にわたって、この色彩ごのみの意義と重要性について言及してをいた。

「今日、数寄屋足袋と聞けば、まず雪白の足袋を連想するのが普通で、それ以外の色は考えられないが、当の茶聖利休の足袋は、青かったと考えられる。古文書によると、利休は浅黄、秀吉は赤地金襴のものをはいていたようだ。

事実、速水宗達（1740—1809）の『喫茶明月集』に、「利休云。小座敷へハ紺色の服を嫌ふと云。いかなる故かしらず。宗旦ハ八十一に及て、紺の足袋をはきたり。利休ハ浅黄の足袋をはきたり」とある。さらに、『茶道辞典』の著者末宗廣氏によると、川上不白（1719—1807）の『川上不自筆記』にも、足袋について、「浅黄は利休、紺ハ宗旦……」とあるよしである。⁵⁾

蛇足ではあるが、これらの文書に出てくる浅黄は文字通りの浅い黄色ではない。『山上宗二記』や『宗湛日記』など利休や秀吉と同時代人の記録に見る浅黄の使用例の分析や、現存の名物裂との比較からも傍証し得るように、青色のことである。

一方、豊後の大名大友宗麟^{そうりん}（1530—1587）の消息を見ると、「関白様御衣裳之様体……御たびはねりぬい赤地の金襴」とあり、秀吉が赤地金襴の足袋をはいていたらしいことがわかる。もっとも、厳密に言えば、宗麟の消息は同時代人による目撃者の記録の一種であるが、宗達や不白の利休に関するものは、利休没後百数十年後のいわば聞き書かと思われ、

信憑性の点で疑問が残る。

しかしながら、『喫茶明月集』の問題の個所のすぐ前の句、「利休云。小座敷へハ紺色の服を嫌ふと云」とある部分は、細川忠興の言葉として早くから伝えられていたもので、『松屋日記』にも、「藤堂和泉守へ忠興、正宗、内藤右衛門御出候時正宗問云（易ハ）小座敷にてハ向色のきたる物を嫌候やと云へり。忠興答云。易ハこん色きたる物を嫌候と云給へる也。」とある。

この文中の易とは宗易、すなわち利休のことで、正宗の質問に答えて、細川三斎が利休は小座敷では、紺色の服を嫌ったと言っているのである。

さらに言えば、幕末の風雲児井伊直弼（1815—1860）は、その著『茶湯一会集』に、今日の実存主義を彷彿させる一期一会を説いて有名であるが、同じ『茶湯一会集』の中で、「利休小座敷へハ紺色の服を嫌と云事、何の故か可追考」と書き、早くも利休の色彩嗜好の特異性に注目していたのである。が直弼はもちろん彼以後今日にいたるまで、この疑問に言及した著書はほとんどなく、私の知るかぎりでは、堀口捨己氏がその名著『利休の茶室』の中で、畳のへり利休当時紺色だった仮定し、そうであった場合、これと同色対比を嫌ったのではないかと推されているのが唯一のものだろう。私は、この点をもっと心理的に深い葛藤に根ざす反撥とみているが、刀掛や利休と秀吉の個所で検討することにして、いまは鋭い直感を見せた直弼さえも直弼さえも見すごした利休の足袋色の検討を続けよう……⁶⁾」

と書きだしているが、余り長い論なので、以下は数頁に総括させていただくと。

「具体的に言うと、茶聖の足袋を浅黄とした場合と、そう見なかった場合と、どちらがより良くその人間像や性格特性にマッチするか、どちらがよく茶聖の逸話や遺作に見る利休風にふさわしいかを見て、この仮説の妥当性を問う方法である。この操作をするうえでまず考えておかねばならぬことは、問題の利休の足袋が数寄屋足袋であり、その色は茶席内の照明状態と不可分の関係になってくる点である。

一方、利休の茶室によって代表されるわびた茶室は、宗教的な精神統一と沈静を目ざす密室で、精神統一と沈静を目ざす密室で、精神性の高揚を目ざす建築の多くがそうであるように、薄暗くたもたれてこそ意味がある。もっとも、厳密に言うと、利休はそれまで北向きが慣例であった茶室を南面させたことで知られている。が、一方では、閉じると全く光を通さない^{にじり}躰を案出したのである。しかも、利休遺構と言われる待庵茶席の南壁に横長にうがたれた明り窓を見ても、多数の連子格子をいれ、そのうえに大きな庇をつき出すなど、直射日光をさえぎるのに懸命である。

また同じ待庵の東の小窓にしても、壁の下地を塗り残して開孔した下地窓方式である。下地に塗りこめられた細竹が、その空間を格子状に臣ぎるため、入射光量はいちだんとおさえられてくる。しかも利休に最も近かった人物の一人である山上宗二も言うように、利休は紹鷗以来席内の壁にはりめぐらされていた鳥の子紙を廢し、荒壁のまま残している。結果として、太陽の移動による微妙な光量の変化はあるが、茶席本来の薄暗さは、北向きの場合に比しても、それほど変わらなかったのである。

現に、茶室の薄暗さは、禪者がその眼を半眼に保持している時の薄明状態を、建築構造の側から造りだしたものと説く僧さえある。

これを要するに、利休が理想の極とした草庵茶席は、今日の色彩心理学から見て、薄暮視に近い状態を明るさの理想としていたのだ。

思えば、この薄暮状の世界の中でも最も人の目に鮮明な色は、赤や黄ではなく、ブルーやグリーンなのである。しかも鎮静効果を第一とする茶会に都合のよいことには、青系統の色は、その鮮明さにもかかわらず、興奮性がなく、鎮静色であり寒色である。

この一点から見ても、利休の足跡を直覚させるに十分と思われるが、佐々木三昧氏によると、利休はまた、「二畳敷には浅黄風炉」という言葉も残している。二畳の席が利休の理想であったことは、『山上宗二記』や『南方録』や待庵の構成からも十分に察せられるが、その思いをこめた二畳敷にこそ、浅黄風炉を配している点に注目すべきだろう。

二畳敷とは、客畳一枚、点前畳一枚の中に炉を切るミニ空間で、主・客の入席後は光がいっそうさえぎられて薄暗さをいちだんと増すのである。この点からも、利休の選択が単純な色彩嗜好や一時の気まぐれではなく、薄暗い所で最も人目に鮮明化する色が青である事実、いわゆる薄暮視現象（プルキニエ現象）を体験的に熟知していた頭脳の所産にほかならない、と推されるのである。

この薄暮現象は、薄明りの中で人間の目の感受性の最高部分が短い波長のほうにずれる結果起るもので、欧米ではその発見者とされているプルキニエ（1787—1869）の名にちなみプルキニエ現象とよばれているが、彼プルキニエがこれを発見したのは1825年にすぎない。これに比し、わが利休は彼に先立つ二百数十年前に、これを先取りし、かつ応用していたとみても過言ではあるまい。

『長闇堂記』にも、「利休二畳敷に、囲炉を初ハすミ切りにせしを、さひしきとて、客の方へ入かへけれとも、又、客三人の下一人より、亭主の後ミへ悪きとて、中へ入かえて…」とある。

この大意は、利休が初期の二畳席に切った隅炉は客からの見えが悪く、客の方へ切りかえたが、それでもなお三人客の場合、お詰（末客）は亭主の後姿を拝まされるだけになる。そこでいま一度炉の位置をかえて……というところだろう。

これほどに客の目の饗応に苦慮奔走した利休が、目につきやすい足袋色に深い配慮をしたのも当然だろう。

事実、茶会において、鮮かな裾捌き、めりはりのきいた足捌きには、足部が視野内に把握されていることが肝要だが、点前には身体各部分を同時に駆使する所作が多く、亭主でも視線を常時足もとに向けておけるものではない。しかも、人の視野の広さは色により広狭があり、いきおい、足袋色も無視出来ない。例えば黄は視野面では良好だが、薄暮視や興奮性の点を考えると不適當である。白は視野的にも良く、また清浄効果もいちじるしいうえ、第一章でのべた明るさの恒常性に助けられて、薄暮状況でも白々さを保つが、緊迫感が強い。これに比して、浅黄＝青は、視野的にも薄暮視的にも満点、しかも寒色で鎮静効果もいちじるしい。

さらに言えば、利休遺愛の服地と伝えられている現存裂地も、浅黄地である。これらの諸点をまとめて検討すると、個々の事実の相互相関性は非常に高く、利休足袋浅黄説は単なる仮説ではなく、その驚くべき先取性、色彩調節と人間工学の先駆者としての足跡の象徴を感じさせる。⁶⁾」

以上のように、本論筆者が過去に歴史心理学や人間工学の面から、きわめて多角的に考究したほんの一点をあげても、利休の視点が、まさに山上宗二もいち早く気付いていたように、普々ならぬことが、傍証されているといえるだろう。

だが、問題は更に深いところにあるのだ。我々は既に足袋というきわめてユニークな足先の二またに分かれた履物を履いて少くとも数百年の時間をすごして来ている。この二またにわれた足袋こそ、他ならぬ日本人の独創品ではなかったのか？

これについては、本論筆者は自著『京都心理学散歩』（初版本出 1969、アテネ出版/増補版 1977年初版東京書籍）の中で、本論筆者独自の足袋の日本における発生と、その進化論さえ展開しておいたのである。

「知恩院と服飾の関係といっても、京都人以外には、ここに像のある宮崎友禅斎の友禅染を思いだすほかには、他人の関係と思われかねぬが、京女の連想にのぼるのは、まず法然上人御忌の晴着だろう。だが、ここにある『法念上人行狀絵図四十八巻』は、かずある上人絵伝のなかでも、上皇の勅命で、第九世法印が選述したもの。しかも、そこには、服飾史のみのがせぬ、足袋の進化過程を傍証するかのような、女人歩行図がまじっている。

じじつ、その第六巻目の第三図に、指またのある前半分の足袋に、モップの頭をふんづけたような奇妙な草履をはいた二女性がえがかれている。絵巻は鎌倉後期の作で、上人も鎌倉時代の人。そこから逆に、足指のふたまたに分枝した、今日の足袋の原型に近いも

のの発生が、それほど遠くないことが察せられる。

さらに、この絵の状況から逆に、防寒防塵よりは、むしろ、鼻緒ずれ防止の具としてももちいられたことが察せられる。私見では、この前半分の足袋こそ、進化論の説く、失われた連鎖（進化の段階的發展を明示する、証拠品の連鎖の環の見失なわれた部分）と同じで、原人の骨に比すべきもの。

同じ絵伝のなかに、ソックス式の襪^{しょうず}もえがかれているが、これは、奈良朝の昔からある、中国伝来の靴下で、靴の中ばきとして履かれたのが、高床脱靴式のわが上流社会にはいりこみ、『源氏物語絵巻』にみるように、屋内ばきになっていたのである。

もっとも、襪の主用者は、まず男性貴人で、『源氏物語』の作者紫式部や『枕草子』の清少納言が家内で襪をはいていたかどうかは断定できぬが、彼女らもふくめて、皇女でない一般女房が、常用した記録はない。『春日権現霊験記』の女房のように、まず素足だったろう。同じ霊験記には、尼公をはじめ旅姿の女人が、指またのない襪らしきものに、草鞋がけの足ごしらえでえがかれているが、ここからも逆に、指またをわった足袋は、襪とは別系統で、鼻緒ずれしやすい労働者や武人など、庶民の間に自然発生し、逆に上へと広がったことを思わせる。

世には泉式部の足袋伝説として、この式部が鹿足奇形を恥じ、ふたまたの足袋を創始したというもあるが、柳田国男のいうように、後人のこじつけだろう。

現に『金葉和歌集』に、素足にわらうずで下鴨詣でをした彼女が、緒ずれになったという歌があり、健康な素足のもち主であったことを傍証している。

他方、『枕草子』のさしぬき袴に関する女房たちの雑談中に足袋という造語がみえるが、脚部をつつむ括り袴の別名として提案したダジャレ言葉であり、ほんとうの足袋ではない。また、納言や両式部の先輩格の道綱の母は『かげろうの日記』のなかで、庶民のしめている脚絆に注目するが、足袋らしいものはみていない。

これを要するに、泉式部の体験は例外で、平安女房の日常には、緒ずれをふせぐ足袋常用の必然はなく、感覚をかいして体験されなかったものは、けっして想像にもあらわれぬ——という法則の証明のように、ふたまたの足袋の必然がなかったのだろう。したがって鎌倉時代の絵伝『法然上人絵伝』にみる、前半分の足袋こそ、今日の足袋の祖型であり、絵巻物の原野にうもれていた足袋⁷⁾原人の骨にも比すべきもの。」

以上のようにみて来ると、古来からわが同邦にユニークな発明工夫がなかった、あるとすれば、折畳み式の檜扇や蝙蝠であったとの説や江戸時代の回り舞台だけが、日本人の独創ではなかったことを物語る、と云いたいのである。

だが、これだけの証拠のみで、本論筆者は西欧文化における科学技術の成果や伝統を否定す

るつもりは毛頭ない。

如何なる技術や思想と云えども、それと対決することになった人間のたまたまおかれた時代や環境風土の産物であり、そのような前歴の影響をまぬがれるわけにはいかない、と言いたいのである。

この点に対して逆にユニークな了解をいち早く提起していたのが、文豪と言われたばかりかしばしば痴呆の性豪作家とけなされ続けた谷崎潤一郎の眞剣な主張である。それは他でもない、昭和八年十二月の雑誌「経済往来」に始まり、翌九年一月に分載を終えたかの『陰翳礼讃』（1933 / 1934）なるユニークな日本文化論の存在である。

若し仮に、日本の鎖国が今すこし続いていたら、日本は日本人の感性にとってよりしっくりしたユニークな科学をもっていたのではないか、という問題提起は、和辻哲郎が彼の第二次大戦中思いなやんだテーマ『鎖国』の中心的主題に対する眞向からのアンティ・テーゼであった。しかも、この場合、谷崎の方が、この西欧流の近代化のテーマを、はるかに早く、一個の独立した大人としてとりあげていたのである。

西欧の知性、特にその技術にのみ文明や文化の華をみ、そのバプティズムを甘受しなければ、人は全き近代人たり得ないとするのは、笑うべき第0回目の「偶像崇拜」ではないかとの根源的問いこそ（もっとも、わが谷崎は決して上のような文言を用いていないが）、谷崎の超常的な知性の洞察力の傍証でなくて何であろう。

谷崎潤一郎が、第二次大戦のホロコーストのさ中、かの『細雪』の筆をおしすめ続けたのは何故か？ それは他でもない、失われ行く伝統文化とそこからのみジェネレートし得るときすまされたような感性と知性の協合した世界が永遠に亡びようとしているのを心底いたむ限りなき愛惜感情の揺曳であったと言えよう。

このような観点でみて行く限り、本論筆者には、世に通俗作家として葬り去られつつある石坂洋次郎（1900—1978）の『若い人』や今や憐れむべき日本主義者として一顧もされない横光利一の『旅愁』さえ、眞剣な再評価の対象として取りあげられるべきだと思念するものである。

世には、本論筆者のような論及を、あわれな深層心理学者の、心理的合理化と一笑にふす向もあろう。だが、日本の近代化の基定に、Ernst Kretschmer（1888—1964）の *Körperbau und Charakter*（1921）や *Geniale Menschen*（1929）らの説く、粘着気質的な性格因子が強い推進力となって、外来技術の反復強迫的な学習に、大いなる寄よをなし得たことは、否定しえないだろう。

ある種の偏見を抱いて見れば、日本が第二次大戦の戦火の瓦礫の中から、あたかも不死鳥伝説を地で行くようによみがえり、高度成長の高みに達したのは、この反復強迫症もハダシの粘着性や超秩序愛や過礼症ともみられる上司や管理当局に対する従順性（Sheepish governability）にあるという指摘も、とかく俗耳にはうけいれられやすい。

だが、本論筆者が、既に彼の技術文化史への序言（1993）で見て来たように、日本人の中にもまた独創の能力にめぐまれた DNA を宿すものは、結好いたし、今もいるのである。

物事の真相は、今すこし別のところにあるのである。かえりみて他を言うようであるが、世界の余りにも多くの知性は、西欧先進諸国にのみ育ったのではない、その多くは、マダム・キュリー夫人（1867—1934）のように小国ポーランドからフランスに身をよせ、祖国の独立運動に身を捧げるべきか、フランスに踏みとどまって科学者として世界的な業をあげ、間接的に祖国の栄光に寄よすべきかの二者撰一の運命の責に耐えた人物である。小国ニュージーランドに生れた Rutherford が、英国をとり、英はおろか世界の原子物理学者として重きをなしたことは、今更ら言う必要もない位であるが、同じくノーベル賞の栄冠に輝く旧ソ連のカピツァ（1894—1984）が、祖国の要請こばみがたく、彼の愛する西側の研究室での自由な身分をすてざるを得なかった逸話も、逸話の域を脱して、少くとも文化人の間では知らぬ者のない哀話としてつい昨今まで語り続けられていたのだ。（続く）

参 考 文 献

- 安西二郎『茶道の心理学』（1971、淡交社）
安西二郎『京都心理学散歩』（1987、東京書籍）
安西二郎『ミッドウェイ海戦の心理学』（1986、PHP 研究所）
桑田忠親『山上宗二記の研究』（1969、河原書店）
谷崎潤一郎『陰翳礼讃』（1992、中央公論）

引 用 出 典

- 1) 安西二郎『ミッドウェイ海戦の心理学』pp. 235—236.
- 2) 桑田忠親著『山上宗二記の研究』p. 2.
- 3) ———, *Ibid.*, p. 57.
- 4) 安西二郎, *op. cit.*, p. 57.
- 5) ———, *Ibid.*, pp. 22—24.
- 6) ———, *Ibid.*, pp. 24—28.
- 7) ———, 『京都心理学散歩』, pp. 39—41.

1994 年 4 月 8 日 受理